

要 旨

現在日本は、かなりの勢いで高齢化が進んでおり、内閣府の令和 5 年度版高齢者白書によると、日本の総人口は令和 4 年で 1 億 2495 万人であり、そのうち 65 歳以上の高齢者人口は、3624 万人となっている。また 65 歳以上の者のいる世帯については、全世帯の約半数を占めており、特に 75 歳以上の人口の割合が高く、総人口の 15.5%にあたる 1936 万 4000 人で、65 歳以上の高齢者の半分以上が 75 歳以上を占めている。

高齢者人口が増加し、高齢化が進み人生 100 年時代と言われている中で、拡大している高齢期をいかに過ごすかが大切であり、その拡大した期間を豊かで充実したものにするために、生きる価値や張り合いといった生きがいを持つことが望まれる。

しかし、高齢者はライフイベントを通して職場の人間関係や収入、社会的地位など社会的役割や父母という家庭内の役割の縮小や喪失体験が多く、それがもたらす影響は大きく、幸福感や生きがいの低下につながりやすい時期である。

国土交通省における 2014 年度住生活に関する意識調査によると、どの世代も半数以上の方が住まいを「安らぎ・くつろぎの場所」「家族団らんの場所」として捉えている。

住まいはプライベートな空間が確保され、自分らしさを維持できる場所であり、自分の生活スタイルを維持し、様々な欲求を満たすことのできる場所で、また家族と共にお互いに助け合い、支え合いながら心の豊かさを育んでいく場所でもある。

住まいは家族関係や社会的要素を含めた人の生活の基盤となるものである。人が快適に安心して生活するための土台であり、生理的欲求を満たし、衛生的で健康を維持でき、満足して安全に過ごしていけるための住環境は重要である。高齢化が進む中で、高齢者の方が安心して生活できる環境づくりは重要であるといえる。

本研究の目的は、シニア世代において幸福感を感じることができる要因は何か、特にシニア世代の住環境について着目し、住まいを含む住環境と主観的幸福感の関連について明らかにし、世代によって住環境が主観的幸福感に与える影響に違いがあるのかについて明らかにすることで、安心して豊かに過ごすことのできる環境づくりに役立てることである。

本研究ではアンケート調査とインタビュー調査を実施しデータ収集を行い、分析はアンケート調査のデータを SPSS を用いて分析し、従属変数を主観的幸福感、独立変数を基本属

性（性別、年齢、家族構成、就労、居住状況）、住環境満足度（9項目）として重回帰分析を行った。インタビューは半構造化インタビューとし、内容は、ICレコーダーで録音し逐語録を作成して分析した。

本研究の分析結果より、主観的幸福感、年代別では20～59歳群より60歳以上群に高く、性別では男性より女性に高かった。また、年代と性別でみると60歳以上の男性に最も高かった。住環境満足度について年代と性別でみると、20～59歳群の男性に最も高かった。

重回帰分析結果より、住環境満足度は主観的幸福感に影響を与えていることが確認されたが、主観的幸福感を高める要因は住環境のみではなく様々な要因が複合されていると考えられる。

また、住環境満足度を得点別に2つに分類し、住環境満足度9～26を中群、27～36を高群とし主観的幸福感を比較したところ、住環境満足度高群の60歳以上に高く、住環境に満足しているシニア世代は主観的幸福感が高いことが示された。

これは、シニア世代は年齢による働き方や身体状況、移動手段等の縮小など外出頻度が減少傾向にあることによって自宅で過ごす時間が長くなり、住環境を大切に感じている人が多いと考えられ、住環境満足度が主観的幸福感につながっているのではないかと考えられる。

昨今空き家が増えており、それによって地域のコミュニティが低下し、犯罪が増えるなど、地域の問題となっている。高齢者が暮らしやすい住環境を整える取り組みをどのように具現化していくのかを検討していく必要がある。

そのためには、地域のコミュニティの育成を図り、地域ぐるみで地域力を強化し、住環境を整備することが重要である。高齢者の積極的な社会参加や地域社会とのつながりを支援していくこともこれからの課題である。それには、その場所で安定した生活を送ることができるようサービスなどの利用のしやすさも必要である。

これらの取り組みを行っていくためには、地域の実情に応じた対応が行えることが大切である。高齢化が進んでいくなかで、高齢者の方が安心して幸せを感じながら暮らしていただけるための住環境の整備に向けたビジョンを描くことも今後の課題である。

今後の研究において、シニア世代の主観的幸福感と住環境について、本研究で検討した項目のみならず、様々な要因について検討し、幸せを感じながら豊かで充実した人生を過ごすことが出来る環境づくりに役立てることにつなげていきたい。